

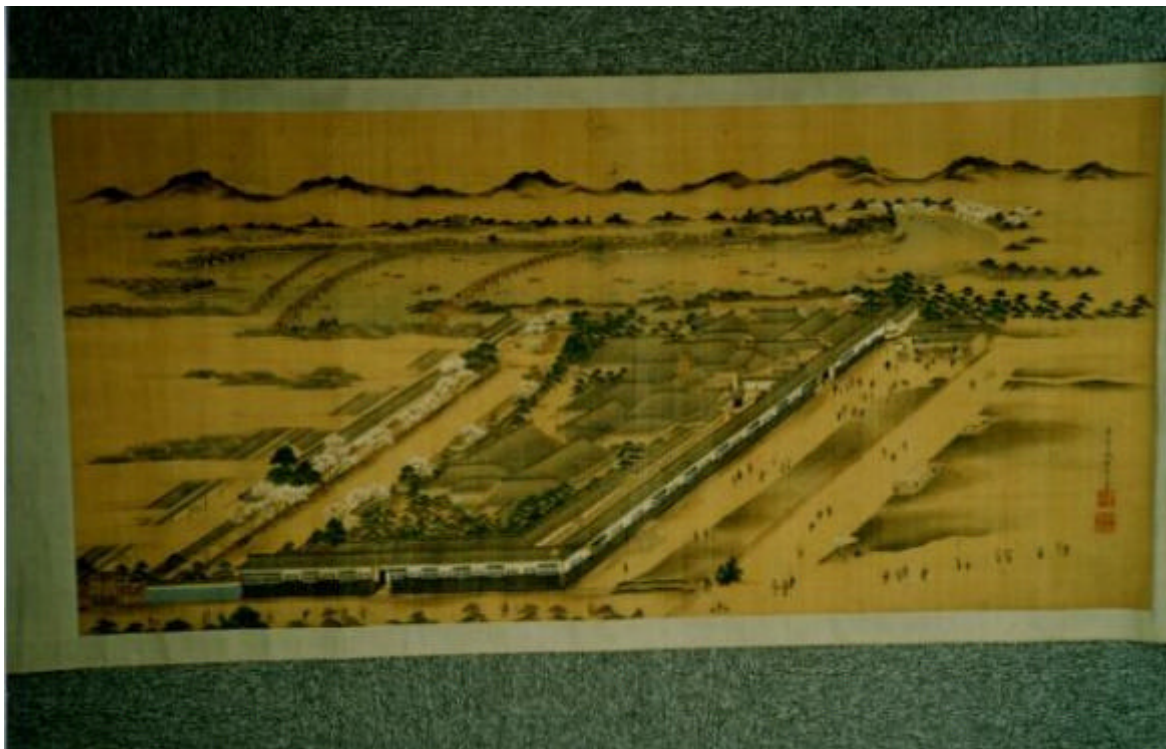
武家社会と江戸・大坂の経済 — 幸田成友とその史料 —

本学所蔵の幸田文庫は、^{こうだしげとも}幸田成友(1873～1954)東京商科大学教授の旧蔵書の一部である。幸田成友教授は大正11(1922)年に東京商科大学予科教授兼同大学助教授として着任され、昭和9(1934)年に停年退官後も、昭和15(1940)年まで講師として本学の教育研究にあたられた。

幸田教授は蔵書家としても知られていたが、本学では昭和26(1951)年から29(1954)年にかけて、武鑑などを中心に和書160点840冊(一部、教授自身から寄贈を受けたものも含む)、洋書12点13冊を購入した。部分購入でもあり、あえて幸田文庫としてこなかったが、平成12(2000)年、図書館の貴重書庫新設にあわせて、一般書架から抜き出し、幸田文庫として保存することとした。

本学の入手した書籍は、実用的な図書や幸田教授の研究スタイルが偲ばれるものが多い。ここに、それらを公開展示し、幸田文庫の書籍と史料の世界を披露したい。

なお、幸田教授旧蔵書の残りの部分は、慶應義塾大学図書館(現:三田メディアセンター)に8500冊(和装本4000冊、洋装本2000冊、洋書800冊、地図260部)が所蔵されている。



大阪東町奉行所掛図

武鑑コレクション



明和武鑑



文久武鑑



明暦武鑑



大名武鑑

武鑑とは、江戸時代の大名および幕府諸役人に関する名鑑である。民間の本屋によって、編集・出版されたことがその特徴であり、利用者の便宜のために見やすいように工夫が凝らされ、また、役人の異動にともなって、随時改定が施された。

近世初期には多くの板元が武鑑の出版を手掛けたが、近世中期以降は須原屋茂兵衛が武鑑を独占的に販売し始める。須原屋は、日本橋一丁目に店を構えた江戸最大の書物問屋である。これに対抗したのは、幕府の御書物師出雲寺和泉掾であった。出雲寺の持っていた武鑑株(版權)をめぐる、須原屋との間で争論も起こっている。(藤實久美子『武鑑出版と近世社会』東洋書林 1999年刊)

幸田文庫には正徳元(1711)年から慶応三(1867)年までの須原屋版の武鑑72点300冊が所蔵されている。特に後期以降はほぼ揃っている。それ以外に、初期の武鑑(古武鑑)類も含まれており、武鑑の成立過程を追うことのできるコレクションとなっている。



江戸鑑



殿居囊

町鑑コレクション

江戸町鑑は江戸の市政名鑑であり、武鑑と同じように毎年改定されて出版された。江戸時代には「ぶかん(武鑑)」に対して「ちょうかん(町鑑)」と読まれていたという。(加藤貴編『江戸町鑑集成』第5巻)。

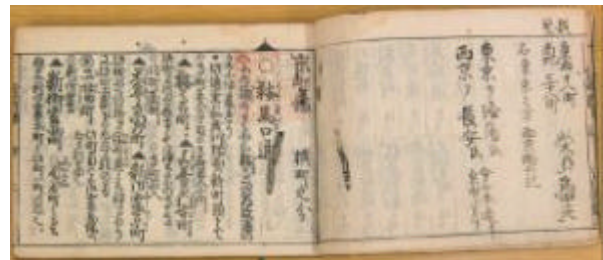
幸田成友は「萬世江戸町鑑」という一文を発表しているが、その中で家蔵の江戸町鑑を紹介し、「出版年月の違ってゐる分を集めて見たいといふ考はあつても、自分一己では及ばないので、同好諸君の御援助を希望する次第である」(『幸田成友著作集』第2巻)と述べている。幸田文庫には江戸町鑑のほかにも、大坂町鑑、京町鑑などの町鑑コレクションともいべき書籍群が残されている。



徳川盛世録



萬世江戸町鑑



京町鑑



大坂町鑑

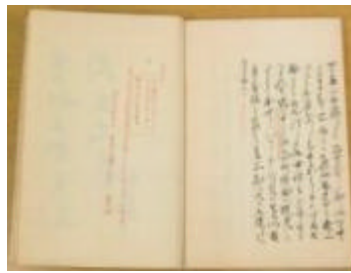
『大阪市史』とその史料

『大阪市史』の編纂事業は、明治34(1901)年より42(1909)年まで行われた。幸田成友は編集主任として編纂に従事した。大阪市役所に着任した幸田は、市史の材料となる史料が皆無なのに驚き、編輯材料の蒐集から始めることを決意する。謄写して製本したものは五百冊余に及ぶ。精緻で実証的な『大阪市史』の成果は、その後の多くの自治体史編纂に影響を与えた。経済史家の土屋喬雄氏は「明治以後における日本社会経済史学の発達」(『日本社会経済史の諸問題』)の中で、『大阪市史』を特別に取りあげ、「市史として最初の代表的なもの」と評価している。成友自身にとっても、帝国大学においてリース(Ludwig Riess)から学んだ実証史学の研究手法を確立した仕事であったといえ、後に著書『日本経済史研究』(大岡山書店 1928)、『江戸と大阪』(富山房 1934)として結実することになる。

本学には『大阪市史』で利用した幸田個人蔵の史料や、『大阪市史』終了後、書写して手元に置いた史料などが残されている。



鴻池新田開発事略



元禄已來古記寫并濱方聞書



古今貨幣図説



大阪町絵図



市中取締類集

『日本経済史研究』とその史料

幸田成友が日本近世経済史の研究成果として上梓した著書に『日本経済史研究』(大岡山書店 1928)があり、「旧幕府引継書類による江戸時代商業の諸側面に関する精密な個別研究」(服部一馬「『日本経済史』の成立と展開」:『社会経済史体系10』所収)と評されている。旧幕府引継書類は、江戸幕府各役所の記録類のうち、東京府に引き継がれ、後に上野帝国図書館(現: 国立国会図書館)に移管された書類の総称である。多くの書類が散逸あるいは焼失する中で、町奉行所関係の史料がよく残っている史料群である。幸田は寸暇を惜しんで上野に通い、みずから毛筆で「旧幕引継本」の多くを書き写したという(増田四郎「幸田成友」:『日本の歴史家』所収)。本学には、その旧幕府引継書類等の写本が数多く残されている。

日欧通交史研究とその史料

関西から東京へ戻った幸田成友は日欧通交史研究に力を注ぎはじめる。昭和3(1928)年から4(1929)年末までヨーロッパ留学を果たし、『和蘭夜話』(同文館 1931)、『和蘭雑話』(第一書房 1934)、『史話東と西』(中央公論社 1940)、『日欧通交史』(岩波書店 1942)、『史話南と北』(慶應出版社 1948)と次々にその成果を発表した。

留学中から洋書も数多く蒐集しており、当時の日本では貴重な資料であった。本学でも幸田成友の旧蔵書のうち、洋書12冊を古典資料センターに所蔵している。



【左上】 Montanus, Arnoldus “Gedenkwaardige gesantschappen der Oost-Indische maetschappy in 't Vereenigde Nederland, aen de kaisaren van Japan” 1669

【右上および下】 Titsingh, Isaac “Illustrations of Japan” 1822



幸田成友教授略歴

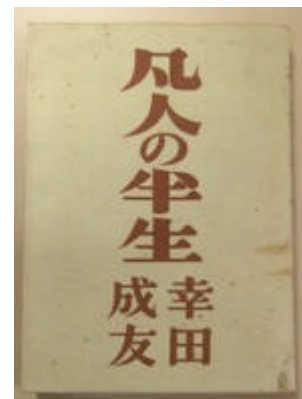
- 明治 6 (1873)年 3 月 9 日 父・幸田成延(旧幕府表坊主役)と母・猷の五男(戸籍上は四男)として、東京府神田区山本町に出生。
- 長兄・成常は相模紡績会社社長。次兄・(郡司)成忠は海軍大尉，退役後千島拓殖に従事。三兄は夭折。四兄・成行(筆名・露伴)は小説家，随筆家，考証家。姉・延はピアニスト，ヴァイオリニスト，東京音楽学校教授。妹・(安藤)幸はヴァイオリニスト，東京音楽学校教授。弟・修造は東京音楽学校在学中に病死。
- 11 (1888)年 2 月 東京師範学校附属小学校に入学。
- 18 (1885)年 7 月 東京師範学校附属小学校卒業，東京府中学校に入学。
- 19 (1886)年 東京府中学校中途退学，共立学校(現:開成中学)・順天求合社で学ぶ。
- 21 (1888)年 9 月 第一高等中学校文科に入学。
- 26 (1893)年 7 月 第一高等中学校卒業。
- 9 月 帝国大学文科大学史学科に入学。
- 29 (1896)年 7 月 帝国大学史学科卒業，同大学院入学。
- 34 (1901)年 5 月 大阪市史編纂主任。
- 42 (1909)年 3 月 大阪市史編纂係解散。
- 7 月 大阪市史調製事務嘱託(大正3年3月まで)。
- 9 月 京都帝国大学文科大学講師(明治44年5月まで)。
- 43 (1910)年 9 月 慶應義塾大学部講師。
- 大正 7 (1918)年 6 月 8 日 宮内省臨時帝室編修官。
- 11 (1922)年 宮内省臨時帝室編修官を病気のため辞す。
- 6 月 16 日 東京商科大学予科教授兼同大学助教授。
- 昭和 3 (1928)年 春 文部省在外研究員としてヨーロッパへ赴く。
- 5 (1930)年 4 月 15 日 東京商科大学図書館委員。
- 6 月 25 日 東京商科大学教授。
- 7 月 29 日 「武家金融に関する研究」により慶應義塾大学から文学博士の学位を授与される。
- (1934)年 4 月 11 日 東京商科大学停年退官，講師となる。
- 14 (1939)年 5 月 31 日 東京商科大学講師を辞す。
- 15 (1940)年 4 月 慶應義塾大学教授。
- 19 (1944)年 3 月 慶應義塾大学退職，名誉教授となる。
- 29 (1954)年 5 月 15 日 逝去(享年81歳)。



幸田成友教授肖像
(昭和7年度東京商科大学卒業アルバムより)



『番傘・風呂敷・書物』



『凡人の半生』

一橋大学附属図書館

平成14年11月1日発行

〒186-8602 東京都国立市中2丁目1番地

Tel.042-580-8247(附属図書館情報サービス課企画係)

本パンフレットに掲載された文章，写真，図版等の著作権は，特記あるものを除いて一橋大学附属図書館に属します。著作権者からの許諾を得ずに，著作権法の定める範囲を超えて，引用，複写，電子媒体化等をおこなうことは，禁止されています。